

江戸時代のホスピタリティ

鍵（草津宿本陣蔵蔵）



(右) 鍵「御鉄砲方 四月四日 御鉄砲方様御泊の節 両懸鍵 三宅様 笠嶋様 斎藤様 大森様 小■様 之間 田中七左衛門		(左) 鍵「行宗春意」 土州様 行宗春意様 草津御泊 合羽や 源左衛門 庭に落ちていたと 子供箒ひろい候	
---	--	---	--

田中七左衛門本陣に残された膨大な歴史資料の中でも特にユニークなのが、全 18 点の「忘れ物」です。このうちの一つ、煙管入れが“新選組の忘れ物”として有名になりましたが、他にも興味深い資料が含まれています。

例えば 2 組 3 点が残る「鍵」。そのうち 1 点に結び付けられた紙札には、田中七左衛門本陣の「四月四日 御鉄砲方様御泊の節」の忘れ物とあります。「三宅様」以下 5 名の部屋にあったと書かれていることから、5 人が相部屋で泊まったと推測できます。

「両懸鍵」とあるため、2 つの挟箱やつづらを棒の両端にかけ、肩にかつぐ荷物の一種「両掛（りょうがけ）」の鍵と見られていたようです。これが今でも草津にあるということは、持ち主の元には戻らなかったわけですが、果たしてスペアキーにあたるものは持っていたのでしょうか。いろいろな想像がふくらみます。

もう 1 つは 2 点と一緒にこよりで結ばれており、紙札によると「土州（土佐藩）」の行宗春意という人物が草津宿内の合羽屋という旅籠に忘れたもののようです。「庭に落ちていた、と子供が箒で拾った」と、発見時の状況まで書き留められていました。本陣での落とし物ではないものまで七左衛門家が保管していたことから、草津宿内、あるいは本陣利用者の同行者の忘れ物を本陣で預かる仕組みがあったこともうかがえます。

実は、江戸時代の「忘れ物」であると明確に分かる歴史資料は、全国的にも珍しいものです。多数あったであろう忘れ物の中から、なぜこれら 18 点のみが現在まで残ったのか。残念ながら具体的な理由は不明ですが、持ち主と思われる人物の名や発見場所を詳しく記録していることから、「お客様の持ち物を大切にお預かりしよう」という当時の人々のおもてなしの心がうかがえます。

（令和 6 年 6 月・草津宿街道交流館 富田 由布子）